

い危機感を抱くにいたつたのである。本格的な帝室論を執筆すべきはこの秋だ、という切迫した気分が文章の端々から伝わってくる。『わたなべ・としお』1939年6月甲府市生まれ。慶應義塾大学、同大学院修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学総長を経て現職。外務省国際協力に関する有識者会議議長。外務大臣表彰。正論大賞。著書は『成長のアジア』、『停滞のアジア』(吉野作造賞)、『開発経済学』(大平正芳記念賞)、『西太平洋の時代』(アジア太平洋賞大賞)、『神経症の時代』(開高健賞正賞)、『決定版・脱弾論』など多数。論今こそ明治維新的リアリズムに学べ』など多数。

実施が交付されて以来
政黨の議論がさまざまにな
る問題について沸騰」を
しているが、「抑も政黨

時代からも解き放たれる、という期待感が社会に充満していた。この時期の社会思潮の中に身をおいて、福澤はかかる状況では天皇と皇室が政治利用されかねない、という深

この最初の一文が論説のすべてを凝集しているといつていい。

大日本帝国憲法が明治22年に公布され、第一回総選挙が翌明治23年に実施されることになった。国会が開設されれば、国民はそれまでは異なって自由を十分に謳歌できる、薩長藩閥政治の重苦しい

る。私のつたない解説
はできるだけ避け、福

前拓殖大學學事顧問

渡辺
利夫

A black and white portrait of Dr. Toshiaki Kondo, a man with glasses and a suit.

福澤諭吉の文章は、当代のいずれの論客に比べても抜群に豊かな表現力に満ちている。福澤の天皇論は、氏の文章のあちらこちらに散見されるが、本格的にこれを主題として論じたものが『帝室論』である。福澤自身が創刊した日刊紙『時事新報』の明治15年4月26日付から5月11日付まで12回にわたって掲載され、後に一書にまとめられたものである。近代社会における天皇と皇室のあり方を縦横に論じて、しかし重要な論点を逸することがまったくない。

は直接万機に当らざして万機を統べ給ふ者なり」という。

は直接万機に当らざして万機を統べ給ふ者なり」という。

天皇や帝室たどは
これが存在せざとも別
に不都合はないといつ
た考え方をもつ人もいよ
うが、思いちがいもはな
はだしいと福澤はいう。
「精神と形態と孰れ
が重きや。精神は形態
の帥なり。帝室は其帥
を制するものにして、

兼て又その形態をも統べ給ふものなれば、なんぞ之を虚位と云ふ可けんや」

か。この一事を考えてみると、ただ、「あ、やっぱり私どもの心底には天皇というものが大いなる存在として潜在しているのだ」という認識に改めて誘^{さな}われるのではないか。

**帝室は社外のものなり
福澤諭吉の中の天皇**

本の長い歴史の中で権力とは無縁の存在であったが、それがゆえに高い権威を

い危機感を抱くにいたつたのであろう。本格的な帝室論を執筆すべきはこの秋だ、という切迫した気分が文章の端々から伝わってくるを異にして、自由改進政黨の議論がさまざま実施が交付され以来、な問題について沸騰しているが、「抑も政黨なるものは各自に主義

従ふ者はこれを許し、
従はざるものには之を罰するのみ。畢竟形態の秩序を整理するの具にして人の精神を制する者に非ず」

ポイントである。

そして、帝室が国民精神を收攬するためには、帝室が「政治社外に在るに非ざれば行はる可らざる事なり」と

形態を定めるものである。帝室はまぎれもなく形態の中心に位置し、形態の全体を一つにまとめる役割をもつ。どうしてこれを虚位などと

もって日本の社会と文化の「帥」でありつづけた。永遠にそうありつづけて欲しい。

『わがなご・よしお』 1939年6月甲府市井

政治といふものは、所

の一文に返る。

元号が平成から令和

第三回

詐は法律を制定・交付し、人民をしてこれに従わせるという、つまりは形態の秩序を作り出すことだけを任務とする、そういう実に「殺風景」なるものだといふ。さらに、福澤は論をこう進める。すなわち、政治とは政事のことごとくに対応してこれを処理し、社会の外形的秩序形成に資するものであるが、他方、「帝室

に変わった。この慶事に国論が湧いて、久方ぶりに日本人の多くが幸福感に浸っているかのように感じられる。なぜ改元が国民に幸福感を呼び覚ますの

明治15年の文章である。